

りふれた信仰生活」の体験は、彼の言葉に開放性とダイナミズムをもたらしている。彼において宣教と思索は一体のものであった。今後は、書簡集によって宣教活動を追いながら、並行してそれ以外の諸論考を考察していく必要がある。

ヴィジョンとイメージ

細田 あや子

宗教と美術との関係をどのように方法論的に理論づけるかという課題に対し、中世ヨーロッパの幻視家（なかでもヒルデガルト・フォン・ビンゲン）が見たヴィジョンの視覚イメージを手がかりに考察する。宗教において美術がどのような位置を占め、どのような役割を果たしたのかという問題、つまり美術作品を通して、宗教における人びとの認識、イメージに対する宗教的態度といったものを考察するための端緒として、まずは「幻視の図像学」という観点を明らかにする。それに基づいて、メタ絵画あるいはメタ宗教絵画といえるような作例を取り上げ、美術作品が宗教生活にどのように用いられていたかを検討する。

幻視は宗教的な告知、知らせの媒体である。これらを通して神・超越者がメッセージを伝える。その神や超越者の顕現は現実世界への異界の現出となるが、その異なる次元を視覚的に表現するためにさまざまな工夫が施される。幻視の絵画表現をみるにあたっては、幻視者のみが描出されているもの、幻視者と

幻視の内容があわせて描出されているもの、幻視のみが描出されているもの、と大きく三通りのタイプに分類することができ。幻視の内容だけでなく、幻視者もあわせて描出されているか否かといった違いが、その画像内容の理解を左右することがある。さらに人間（幻視を受け取る側）と超越者との関係もきわめて巧妙にかつ多様に描出されうる。天使が幻視者と幻視内容とを結合する場合があるように、幻視や夢では、異次元なるもの、この世ならざるものとのコミュニケーションが決定的な意味を持つ。天使のほかさらに、雲や光線による場の仕切り、太陽や星など天体の（異常な）描写による超自然現象の表現、神の手を通して神の存在そのものを示す手法などにより、異次元世界が表現される。

また幻視を見る者は受動的というよりは、彼／彼女らに対しては積極的な振る舞いが前提とされていると考えられる。幻視のなかで幻視者たちは神に問いかけをし、応答を受け取るという双方による対話がなされるのである。幻視者が自らの幻視内容を見上げている画像などでは、観想の状態にあったり、自ら幻視の意味（超越者からのメッセージなど）を把握する幻視者、さらには預言者、予見者という側面が強調される。

ところで、中世からルネサンスに至るまで宗教美術の機能のひとつとして、信仰心をかきたてるため、心を動かさせるために画像は用いられるという絵画論があげられる。そのような画像として、Andachtsbild（観想のための像、祈念像、祈禱像）というものがある。祈念像のような視覚イメージを目の前にしてヴィジョンを体験し、祈りや神との対話がなされる場合も少

第4部会

なくなく、とりわけ中世の神秘主義的な靈性においてそれは顯著である。ある修道女が悔い改めをして、ヴィジョンを受け至福の状態へと達するまでの神秘的な道程が描出されている写本挿絵からは、当時のイメージに関する理論や実践をうかがうことができる。画像を通して見えるものから不可視なるものを体験してゆくという過程が巧妙に読み取れるが、そのような絵画は、メタ絵画（メタ宗教絵画）ということができないだろうか。絵画（画像、イメージ）そのものがテーマとなり、絵画とは何かということを再帰的に示している絵画、とくにそれが宗教絵画であれば、そのような画像をもとに、宗教における絵画の機能を分析することができると思われる。そこからさらに宗教美術の特色などを明確にすることも可能であろう。

マルグリット・ポレートに対する

異端審問について

村 上 寛

本発表はマルグリット・ポレート (Marguerite Porete) に対する異端判決について考察することを目的としている。ポレート及びその著作、『単純な魂の鏡 (Miroir des Simples Ames)』（以下『鏡』）は異端判決を受け火刑に処されたが、異端と指摘された十五箇所の内、その具体的内容が分かっている三つの内の二つの箇所について、その異端判決の根拠とポレートの真意を明らかにすることが本発表の目的である。

指摘された異端箇所の内、第一番目として示されているのは次のような文章である。

「滅却された魂は諸徳に別れを告げ、もはや諸徳に仕えない。というのも、そのような魂は使用するための諸徳を持たず、むしろ諸徳が（その魂の）意図に従うからである。」

これは諸徳の否定、それどころか何が徳であるかは魂の意図に応じて決まるという異端的な主張に思われるが、本当にそのような主張なのだろうか。

スコラ学の一般的理解によれば徳とは習慣・ハビトゥスであり、それによつて善を為さしめるところのものである。従つて「諸徳に別れを告げる」という言説は、それによつて善を為すところの根拠を捨て去ることに他ならない。徳とは仕える対象や使役する対象ではなく、魂自身の傾向性の問題であり、魂の意図に従うとか従わないといった対象となるものではないのである。

これに対してポレートが諸徳と見なしているのは人間本性に密接に関わるハビトゥスであるところの徳ではなく、世間一般において徳に適うと見なされるような、外的な規定によつて習慣的に為されている諸々の行為のことである。ポレートはそのような「習慣」を否定しつつも諸徳そのものは否定していない。すなわちポレートが「諸徳に別れを告げる」という言説で意図しているのは、外的に規定された習慣の否定であつて、徳そのものの否定ではないのである。神に由来する善いハビトゥスを持った魂であれば、その魂は必然的に徳に適う行為を為すはずである、とポレートは考えるのである。